七戸町立 鷹山宇一記念美術館

第13号
（平成10年12月15日）

SUPORTERS CLUB NEWS
友の会 会報
TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-2501
青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94
七戸町立鷹山宇一記念美術館内
鷹山宇一記念美術館友の会
TEL 0176-62-5858 FAX 0176-62-5860

鷹山宇一画伯 東奥賞特別賞を受賞

青森二科会長 池田恭三氏も八戸市文化賞を受賞

第51回東奥賞特別賞を鷹山宇一画伯が受賞されたニュースは、先の東奥日報紙上で紹介されましたが、その贈呈式が、去る12月2日(水)正午より、青森市の青森国際ホテル2階「春秋の間」において、開催されました。

また、前月の11月には、青森二科会長の池田恭三氏が、八戸市文化賞を受賞されました。

贈呈式当日には、鷹山画伯代理として、長女で財団法人鷹山宇一記念美術振興会副理事長でもある鷹山ひばり氏が出席し、画伯のお礼の言葉を代読されました。

会場には、画伯の三女、広田くるみ氏をはじめ、福士孝衛七戸町長、濵中達男財団常務理事、同じく佐藤亘理事、戸舘昭吉理事が出席しました。

また、東奥日報社社長佐々木高雄氏のご厚意により、当日のご挨拶の文章を頂きましたので、鷹山画伯のお礼の言葉とあわせてご紹介いたします。

【贈呈式で鷹山画伯のお礼の言葉を代読する鷹山ひばり氏】

鷹山宇一画伯より お礼の言葉

本日は栄誉ある賞を頂戴いたし、又ただ今は分に過ぎたお言葉を賜り誠に有り難うございました。

本年、年始めに、やはり受賞の喜びで始まり、春には卒寿展開催、夏には金婚式を迎え、そして、年のおさめにこのような大きな賞を頂き、平成10年は、私にとって忘れることができない月日となりました。

若いときから華やかな舞台には縁がなく、自ら「無冠の帝王」と己自身を励ましてまいりましたが、人生の締めくくりに、郷里の皆様方から暖かいお心を頂き、言葉に言い表せない感激でございます。

余命いくばくもないわたしは、自分のためは無論のこと、世の中のために生きるには少々歳をとりすぎてしまいました。

しかし、美を追究していく意欲は衰えることを忘れております。

凛とした薔薇の花を描き続け、絵筆一本、ひとすじの道のりを全うしたいと願っております。

本日は誠に有り難うございました。

平成10年12月2日
鷹山宇一

東奥日報社 佐々木社長よりごあいさつ

本日、第51回東奥賞の贈呈式にあたり、受賞者各位をはじめ、ご来賓の皆様には、お忙しいなか、まげてご出席いただき、誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

平成10年は、当社にとりましては東奥日報創刊110周年の記念すべき年に当たります。その節目の年の東奥賞は、地方出版社の草分けとして、貴重な出版物を相次いで世に送り出してこられた津軽書房の高橋彰一殿、昭和48年に季刊総合誌「しもきた文化」を創刊して以来、地域にかかわった優れた評論や作品を全国に発信し続けている下北文化社殿、今年9月に行われたプロボクシングWBAスーパーフェザー級タイトルマッチで果敢なファイトで見事世界チャンピオンに輝いた畑山隆則殿に贈らせていただきました。

また、東奥賞特別賞を、永年にわたる太宰治の研究や本県人物学史ともいえる著書「北の文脈」シリーズなどで本県の文芸振興に多大な貢献をされた小野正文殿、画業70年、独自の幻想

的作風で画壇をリードし続ける鷹山宇一様に贈らせていただきました。

これまで東奥賞は合わせて64団体120人となり、特別賞、特別顕彰、特別栄誉賞は8人の方々への贈呈となります。

東奥賞は東奥日報社が昭和23年に創刊60周年、紙齢2万号を記念して制定した県民顕彰の一つでございます。

青森県内の個人と団体、または県外にお住まいの県人のなかから、産業経済、学術文化、あるいは社会福祉やスポーツなどの各界に寄与・貢献された方々のご努力やご芳志に感謝の心をこめて、県民に代わってお贈りするものでございます。

同時に、受賞された方々に続く人材を広く求め、青森県の発展・振興に役立てたいとの願いをこめて、毎年、当社の創刊記念日であります12月6日前後におくらせていただいております。

受賞者は、それぞれの分野で地道な活動や精進を続けて成果を挙げておられます。受賞者のご功績の詳細はお手元のパンフレット、あるいは東奥日報紙上にご紹介いたしました記事に譲りますが、青森県内では最も歴史が古く、半世紀も続いている県民顕彰であることをご理解いただき、今後とも精進を積まれ、一層ご活躍下さいますよう祈念いたします。

最後になりましたが、ご多忙のなか出席を賜り、副賞をお贈り下さいました木村知事ならびに、毛内県議会議長、大変有り難うございました。また、引き続きご祝辞を頂戴いたしますご来賓の方々にも心から御礼申し上げます。

平成10年12月2日

株式会社東奥日報社

代表取締役社長　佐々木高雄

写真家の秋山庄太郎氏から鷹山画伯へお祝いの言葉がよせられました。

純粋で頑固で、いかにも東北人。46年前に二科会に写真部ができた時からの付き合いだが、鷹山さんでなければ描けない形式を持ち、細密な仕事を貫く姿勢には敬服する。

私がヨーロッパに行った40歳のころ、クラシックで丁寧な絵が主流になっていくと感じた。その第一に思ったのが鷹山さんだった。ファンとして30数年前に無理して作品を譲ってもらったことがあるが、人手に渡ってしまったのが、今では残念でならない。

制作する数は少なくなったかもしれないが、作品への心がまるで変わらない。これは称賛に値する。受賞おめでとうございます。百歳まで頑張って下さい。百歳の鷹山さんをぜひ撮らせて下さい。

（平成10年11月27日掲載　東奥日報朝刊より）

全日本写真連盟副会長
二科会写真部代表
鷹山宇一記念美術館名誉顧問

池田恭三氏　八戸市の文化発展振興に大きく貢献

去る10月30日、八戸市は本年度の文化賞などの各賞受賞者42人、3団体を発表しました。

文化賞には、青森二科の池田恭三氏他3名が決定し、その表彰式が11月5日午前11時30分から八戸グランドホテルで開催されました。

八戸市によりますと、『昭和40年に初めて二科展に出品した作品「姉妹」が入選して以来、現在まで同展での入選が30回を数える。中でも昭和49年の作品「いたこA」は特選を受賞し、同年、八戸市文化奨励賞を受賞する。

翌昭和50年には二科会会友に推挙され、現在、青森二科会長、県展運営委員、八戸市文化協会展審査委員、NHK文化センター講師等を務め、後進の指導育成に尽力し、当市における文化の振興発展に大きく貢献している。』として今回の賞が贈られたとのことでした。

池田氏は、当館で毎年開催している春季二科展を、青森二科共催、青森支部展併催というかたちでバックアップしていただき、支部の中心となってご尽力いただいております。

このように、当美術館でも非常にお世話になっている池田氏の今回の受賞は、大変うれしく、今後の益々のご活躍をご祈念申し上げます。

池田恭三氏【H.10.4.24 春季二科展オープニングレセプション】

スペイン美術紀行（友の会研修旅行）

開館5周年記念・友の会結成5周年記念のスペイン旅行は現在まで35名様のお申し込みがありました。

最終的な日程が決定しましたので、お知らせいたします。

第1回募集締切は今年の12月31日ですので、ご希望の方は当館友の会までお申し込み下さい。

日程表2000年（平成12年）

★1月19日(水)12：39　三沢駅発
★1月20日(木)09：20　バルセロナ着
　ガウディ作品見学
★1月21日(金)　ミロ美術館見学
　ピカソ美術館見学
★1月22日(土)　ダリ美術館見学
　カダスケス見学
★1月23(日)　マドリード
　プラド美術館見学
★1月24日(月)　トレド観光
★1月25日(火)　マドリード自由行動
★1月26日(水)18：00　成田空港着
★1月27日(木)07：18　三沢駅着

※詳細はお問い合せ下さい。

鷹山宇一記念美術館 NEWS & REPORT 1998.12 Vol.12

銅版画のワークショップを開催しました。

「銅版画の様々な表現が生まれるまで」

去る11月28日、29日の2日間にわたり、講師に世界的な版画展で数々の国際賞を受賞されている戸村茂樹先生をお迎えして、昨年に引き続き2回目となる銅版画教室～銅版画の技法と刷りのワークショップ～「銅版画の様々な表現が生まれるまでパートII」が開催されました。

1日目は20名の受講生が参加しての講演会と作業工程、作品の紹介、2日目は、限定6名での実技制作指導が行われました。

6名の受講者がエッチング技法に初挑戦!!

前回は、ドライポイントによる作品の紹介と実技指導をしていただきましたが、今回は、腐食による版技法エッチングについて解説と実技指導をしていただきました。

1日目は、当財団の青山理事長の挨拶の後、同じく財団の戸舘理事から講師の戸村先生の紹介があり、20名の受講者の中講演会が始まりました。

はじめに、スライドによりレンブラントなどのエッチング作品を紹介しながら、それらの表現がどのような道具によって制作されているのか詳しく解説していただきました。

次に、実際の作業工程を実演を交えながら解説していただき、一枚一枚の仕上がりの様子を間近に見ることができました。

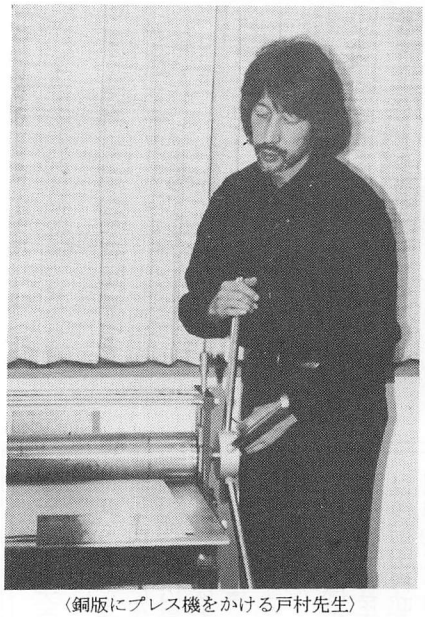
2日目は、受講者6名に対し、ソフトグランドエッチングとハードグランドエッチングの実技指導をしていただきました。

最初は、銅板の描画面にグランド（防蝕剤）を塗布し、ローラーでまんべんなくのばします。次に各自用意してきた下絵をトレーシングペーパーに写し、銅板の上に重ね合わせます。その上から鉛筆やボールペンなどで下絵をなぞることにより、描画した部分のグランドが銅板からトレーシングペーパーに写し取られます。そして、描画が完成した後、塩化第二鉄の水溶液に銅板を浸し腐食させます。このときトレーシングペーパーに写し取られグランドが剥離した部分だけが腐食していき、版が完成します。最後に、腐食し溝になった部分にインクを詰め込み、余分なインクは拭き取って、プレス機を通し銅版画が完成します。

以上がソフトグランドエッチングの作業工程ですが、ハードグランドエッチングは、ニードルという先の尖った専用の道具により、直接版面のグランドを削り取り腐食させます。

こうして2日間にわたる講習も無事終了し、実技では長時間にわたる制作にも関わらず、時間が過ぎるのも忘れて集中している様子が伺われました。

最後に戸村先生には、是非来年も機会があれば呼んで下さい、との大変嬉しいお言葉をいただきました。その時にはこの紙面を借りてご案内いたしますので、みなさんお楽しみに!!



〈銅版にプレス機をかける戸村先生〉

美術館日誌より

【九月】

◆第42回火曜サロン開催（8日）
◆六ヶ所第二中学校様一行24名来館（13日）
◆弘前中央高校図書新聞委員様一行来館（15日）
◆蟹田町文化協会様一行来館（23日）
◆弘南鉄道友の会様一行40名来館（27日）
◆六戸町社会福祉協議会様一行40名来館

【十月】

◆約一年にわたりボランティアで美術館をお手伝いいただいた浜中央子さんの送別会を開催（6日）
◆第43回火曜サロン開催（13日）
◆青森市浅虫帰帆荘で開催された東北美術館会議に大池亜希子学芸員出席（21日）
青森県総合芸術パーク構想等に関して協議される。
◆当財団平成10年第1回役員懇談会を開催（26日）
来年度企画展等に関して協議される。
◆あすなろ尚学院様一行15名来館（28日）

【十一月】

◆青森県畜産会様一行31名来館（6日）
◆第44回火曜サロン開催（10日）
◆七戸町立野々上小学校様一行来館（10日）
◆戸村茂樹先生銅版画教室開催（28、29日）

お知らせ

鷹山宇一記念美術館開館5周年を記念して

平山郁夫展

世界の文化遺跡を描く

平成11年
4月29日(木)
5月30日(日)

平成11年、開館5周年を迎える鷹山宇一記念美術館では、これを記念した特別企画展として「ー世界の文化遺跡を描くー平山郁夫展」を開催します。

昭和5年広島県に生まれ、現在、院展を中心に活躍されている日本画家・平山郁夫画伯は、その旺盛な制作活動に打ち込まれるかたわら、世界の文化財保護のための国家的事業に精力的に尽力され、昭和63年には「世界文化財赤十字構想」を提唱されました。

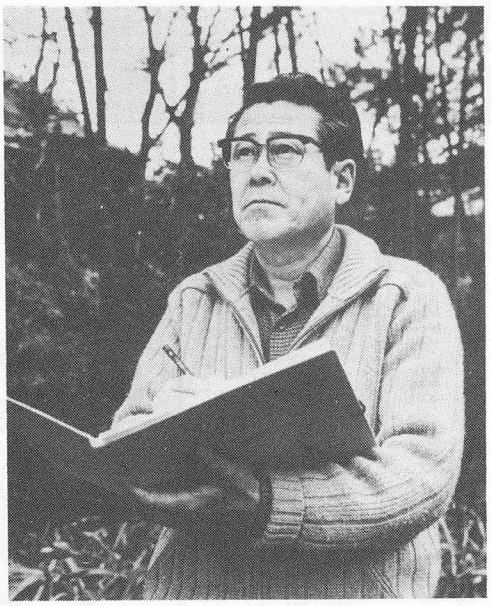
この構想は、仏教伝来からシルクロードへと、画伯が長年にわたり世界各地の取材を続けるうち、消滅、破壊されつつある文化遺跡に接し、その保存・修復をはかろうと、国際的な文化財保護活動の必要性を唱えたものです。人類が創出してきた文化財や文化遺産を、国境、民族、宗教を超えて保存修復し、栄光の足跡を次代に伝えていこうという民間の運動であり、それを通じて異文化への相互理解を深め、「文化」を旗印にした国際貢献を果たそうというものです。この提唱は、文化財保護振興財団の創立につながり、また、今日まで画伯が率先して行ってきた救済活動は、中国の敦煌、南京城壁、カンボジアのアンコールワット遺跡や、諸外国の日本古美術品など多方面にわたっています。

本年、これらの活動や日本画壇をリードしてこられた多岐にわたる活動が高く評価され、文化勲章を受章されたことは皆さんもご承知のとおりです。

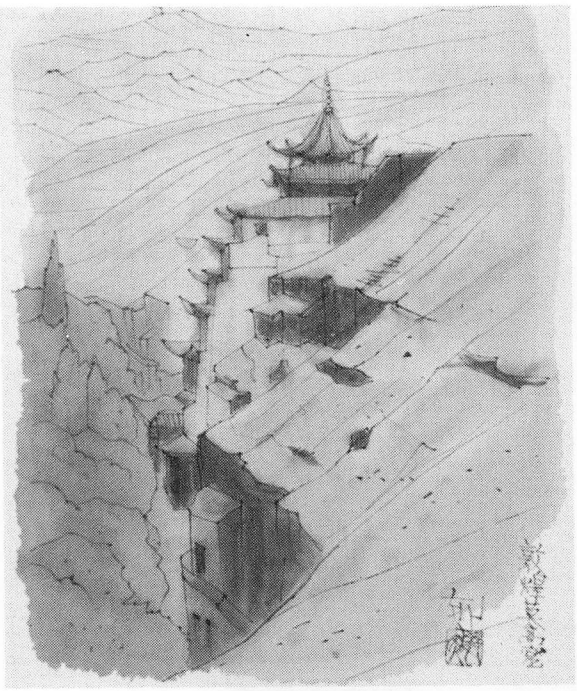
今展は、画伯が三十余年にわたり約百回、30万キロにおよぶ取材旅行によってこれまで制作された膨大な素描作品の中から、世界の文化遺跡10カ所を選び、人類の残した文化財に寄せる画伯の心に触れ、改めてその画業を回顧すると同時に、広く文化財保護についての理解と協力の呼びかけを行おうというものです。

ヨーロッパ、西アジア、中央アジア、東南アジアの各国、中国そして日本の文化遺跡から、本画4点と素描80点により展観します。

また、当館のみの出品として、国立公園十和田八幡平・奥入瀬渓流を描いた屏風『流水無間断』を大下図とともに、同じく八甲田を描いた素描『八甲田山の残雪』が展示されます。



平山郁夫画伯
(「ー世界の文化遺跡を描くー平山郁夫展」図録から)



今展図録の表紙を飾る素描「敦煌莫高窟」

◆平山郁夫画伯略歴◆

昭和5年、広島県瀬戸田町(生口島)に生まれる。
昭和20年、広島で原爆投下に出くわし放射能を浴びる。
昭和22年、東京美術学校(現、東京芸大)日本画科に入学。
昭和27年、同校卒業、日本画科副手(翌年助手)となり、以後前田青邨に師事する。
昭和39年、日本美術院同人に推挙。同時に東京芸大講師となり、昭和44年助教授、昭和48年教授、平成元年には学長に選ばれる。
昭和28年、第38回院展で初入選、以降入選を重ね、院展を中心に活躍。
被爆の後遺症が出始めた昭和34年、学生を率いる写生旅行で八甲田山に登り、瑞々しい深緑の輝きに感動、同時に代表作となる「仏教伝来」の構想が浮かぶ。以後、仏伝シリーズからシルクロードシリーズへと広がりを見せ、その取材旅行を通じて、滅びゆく文化遺跡を目の当たりにすることとなる。
平成5年、文化功労者として顕彰される。
平成9年、故郷・瀬戸田町に平山郁夫美術館開館。
平成10年、文化勲章受章。

春季二科展

当館でも春の企画展としてご好評をいただいておりました春季二科展。(社)二科会により毎年3月、東京・松屋銀座で開催されておりましたが、平成11年については開催しないことと決定されました。誠に残念なことではありますが、これにともない当館での開催も平成11年はお休みいたします。

平成12年以降、(社)二科会による開催にともない、当館でも春の企画展として開催してまいりたいと思います。その日まで、今しばらくお待ちいただきたいと思います。

美術館年末年始の開館について

12月28日(月)は開館し、12月29日(火)～新年1月2日(土)までを年末年始の休館とさせていただきます。
1月3日(日)から平常どおり開館します。新年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

連載★彫刻のはなし

吉野毅先生。講演会場にて

先号から開始したこの連載は、彫刻への理解を深めようと、去る7月5日に開催された二科会彫刻部会員・吉野毅先生の講演会から、その内容を一端ではありますがご紹介しようというものです。2時間にわたり、彫刻史のみならず、彫刻家として先生自身が感じたこと、体験したことなど、ナマのお話をいただきました。

日本の彫刻史っていうのを話すと、どうしても埴輪から仏像ということになるんですが・・・。

ーと、いうことで、数多ある仏像の中から吉野先生が感じ入った凄いものとは？ー

《百済観音》

飛鳥時代・法隆寺

これは今どこに行ってるんだろうなあ、百済観音っていって、とうとうフランスのシラク大統領がパリに持って行ってしまったという仏像です（ルーブル美術館で展示され、帰国後日本国内を巡回し、法隆寺に百済観音のために新築されたお堂に9月4日納められた）。僕は（海外へ）持ち出してほしくなかったんですが・・・。これについて作り手から言わせてもらいますと、この像を作った人は、これ一点だけでほかに作っていないんじゃないかと思いたいです。つまり様式が類似した像が見あたらないことと同時に、完璧に近い造形美であるからです。よく見て頂くと、不安定な感じがして、立っている感じがちょっと弱いんじゃないかと思われますが、押し付けがましい形ではない。どんな心理状態の人でもすべて受け入れてしまう、包容力と気品を感じますね。そして像のまわりの空気を震わせているような緊張感。完璧ですね。国宝の中の国宝だと思います。

《重源像》

鎌倉時代・東大寺俊乗堂

これは機会があったら是非見てほしい彫刻です。鎌倉時代に東大寺を再建した重源というお坊さんの肖像彫刻なんですね。このリアルな顔の表情と猫背の全体像は、本人を知っていなければ絶対できないと思います。写実をしすぎると弱くなる場合が多いのですが、これは日本の肖像彫刻の最高傑作であると僕は思っています。（これまでの肖像彫刻で作者が本人に接していたことが確実と見られるものは、唐招提寺の鑑真像とこの重源像のほかごく僅かであり、一般的には作者の脳裏に描かれた姿を造形化したものがほとんどである）

ー1960年代の彫刻と吉野先生の転機ー

20世紀の彫刻を作者の立場で話すということは大変難しい、特に現代。世紀末っていうのは垣根を取り払うっていう意味があるらしいですね。まさに現代美術というのは、平面とか立体とかの区分けをしないで、造形作家でくくってしまいます。僕はそういう運動体に属さない作家です。

19世紀後半から1960年代にかけて、2つの戦争をはさみフランス、イギリス、アメリカの順で多くの作家がいろいろな立体表現を試みました。それで1960年代に美術運動体としては息詰まったんですね。僕が大学に入ったのは1963年ですので、ちょうどそういう時期でした。

その頃の大学はといいますと、午前中は必ずモデルさんが来ていました。日本流に言えば、「一糸まとわぬ女性がモデル台の上に立っていた」ということになりますか。しかし、なんにも感じなかったですね・・・。複数の人間が話し合いで決めたポーズっていうのは、無難な片足重心で、義務で立っているわけですから、エロティシズムのかけらもなかったですね。僕は何故こんなことをやるのかと・・・。全員同じポーズ、同じ大きさ、同じような粘土づけですから、アトリエの中に6体ぐらい同じ彫刻が並ぶわけです。

そのような時期にハーバード・リードの「近代彫刻史」っていうのを読んだんですね。僕にとって読まなければならない状況にあったという方が正確かもしれません。その時の結論を言えば、美術運動体として残されているのは、シュールレアリスムしかないということでした。それで僕は、結局頭の方が先行してしまったということになるのか・・・。

そこで大学のカリキュラムに逆らってやった表現手段といいますと（大学のアトリエでやることはできず、寮のアトリエ、アルバイト先の作業場で制作）、女の人を「芸術のためにどうかお願いします」と口説くわけです。口説きにのってくれたのは音楽学部の声楽科の人でした。等身大の人間が入れる箱にゼラチンを流し込み、その中でこっちの言ったポーズをやってもらう、もちろん一糸まとわぬ形でですね（頭部はデスマスクをとる方法で別に作る）。ゼラチンの形に透明アクリル樹脂を流し、できた雄型に頭部を接続、カツラをつけ、義眼をうめこみ、「俺はシュールをやっているんだ」と粋がっていたんですが、所詮自分の中にそういう表現をする体質がなかった、あくまで借り物で、運動体を言葉だけで解釈した表現にすぎなかったんですね。

何故そのように感じたかと言いますと、大学の3年の時、これは否応なしに連れて行かれるんですが、2週間、奈良の研究室に閉じこめられ、毎日お寺さんに連れて行かれるわけです。12月のお堂の中は寒く、辛気くさく、線香臭くて・・・。なんか偉そうなお坊さんがでてきて説教まがいの話をする。何でこんな話を聞かなきゃいけないんだと思いましたね、その時は。ただ帰りのバスの窓から見える風景は、稲の刈り取りの済んだ黒土の田圃、遠くにお寺の塔、逆光で光る白いすすき、それで夕焼けときたら、まさに日本の冬の泣かせる風景ですよ。そこでジーンとしちゃったわけですよ、僕は。「俺は情緒的な、典型的な、日本人なんだ。そういう奴がシュールなんかやってもしようがない。」と・・・。そういう風になんか感じ入ってしまったってことが、まあ、僕の転機であったのかなあと思っています。

それともうひとつは、4年生になったら卒業制作をやらなければ卒業ができない。まして、大学のカリキュラムに沿ったものを制作しなければ、大学院に残れない。大学院に残りたいということは、教授の指導を受けたいということではなく、アトリエが欲しいということだけでしたね。絵画の制作と違いまして、彫刻制作というのは、汚しますし音を出すこともあります。ある程度の空間の広さも必要です。アトリエを確保することが、あの頃一番大切なことに思えました。

しかし、強制的に連れて行かれた古美術研究旅行で観て感じたものが、現在僕の彫刻制作の原点になっているわけですから、分からないものですね。

（次号に続く）

1998年第2回友の会研修旅行

青森県近代日本画・文学の旅

■青森県立郷土館
■弘前市立博物館
■弘前市立郷土文学館
■太宰治記念館「斜陽館」

秋晴れの好天に恵まれた9月27日(日)、通算6回目となる友の会研修旅行が開催されました。当初定員30名で募集しましたが、希望者多数のため増員し、バスに乗れるだけの人数で締め切らせていただき、青森市・弘前市からの現地集合者もあわせ、総勢44名の会員が参加、研修旅行始まって以来の参加者数を記録しました。

満員御礼でバスに揺られ、青森市、弘前市、金木町の文化施設4館を日帰りで訪ねる、少々ハードなスケジュールであったかと思います。

しかし、すべての施設から、解説という謎解きのヒントをいただきながら、作品という地図を見て、青森が生んだ日本画・文学界の偉大な先人たちに時を超えて会いに行く旅……、そんな研修旅行ではなかったかな?と思います。皆さんの印象に残った先人たちとは、どんな方々でしたでしょうか?

弘前市立博物館前にて記念撮影

今回は、弘前市内からご参加くださった友の会会員の皆様に大変お世話になりました。弘前市内の施設への協力依頼や、駐車場、昼食の手配など、細やかなご配慮とご協力をいただきました。研修旅行が盛況のうちに終えてきましたのも、皆様の温かいお心遣いの賜です。本当に有り難うございました。

美術館を応援しようというお心と、津軽・弘前を愛するお心に触れ、温かい心持のまま帰路につきました。この場を借りてお礼申し上げます。

研修旅行に参加して

小向 慎

旅行。日常と違う空間に身を置くということは、大小長短にかかわらず嬉しいもの。それが絵をみて解説して頂いて、の旅行とくれば、何をおいても先ずは参加したくなる。

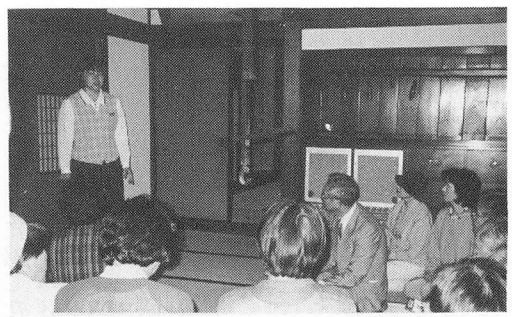
と、いうことで第一番目の「青森県近代日本画のあゆみ展」。名前も知らなかった、名前しか知らなかった先人たちの絵に深呼吸して対面。とは言っても平尾魯仙の『鐘馗』と三上仙年の『鍾馗』とはどう違うんだろうと何度も往復して見たり、我が鳥谷幡山の奥入瀬渓流の良さが分からず頭を振っている側で、郷土館の学芸員が「傑作の一つです」と言っているのを聞き、〜ポッカリ浮かんでいるピンクやブルーの山か雲がいいのかなぁ〜と見直したら、鷹山美術館蔵品だったり。

八戸市出身七尾英鳳画の、縦長な大きな画面の中央部分に小さく描かれている阿寒山中のエゾ松などの木々が、縦長な風景写真の前景に聳える大木のような風格であったのは端整な構図のなかで不思議な感を受けた。

野沢如洋の『奔馬三頭之図』は右に左に移動しながら見る(建物の都合で太い柱が真ん前にたっていたので)。屏風から飛び出さんばかりに跳ねている三頭の馬の姿に圧倒されるが、同じ如洋の瀑布といい鷹といい、墨だから出せた力強さなのではなかろうかと拙い頭で考える。

青森からのお仲間と合流して次の弘前市立博物館へ。赤いりんごの歓迎あり。

「蔦谷龍岬展」は、展示室中に青を漂わせていた。ズラリと並んだ掛軸に緑青と言うのだろうか、鮮やかな青の山々である。山水画の山の奥深く、さらに日本アルプスのような近代的な山並みが浮かんでいるのが多くあり、ほかの人にもこんな画があったか思い出そうとしたけれど良く分からない。


斜陽館にて。職員の方から解説していただきました

弘前の方達とも一緒に記念撮影をしてから追手門広場で美味しい昼食。次いで郷土文学館で高木恭造の声の「冬の月」を聞く。

金木の斜陽館は太宰没後50年の人気のままに大した人出。広い土間をもつ地主の豪邸だが、七戸辺りだと匹敵するお屋敷がないかしらん?

黄金色の津軽平野をあとにする頃は、一仕事終えた程よい疲れと喉を潤したビールのお陰で和やかな車中となり、中身の濃い大変結構な研修旅行でありました。

(友の会会員)

編集後記

師走。身体も心も何かと忙しないこの頃。振り返ってみれば時の流れは速いものだと感じてしまいます。1年はアッという間ですね。会報も13号となりました。相変わらず活字の多い、細ぁ〜い会報となってしまった感がありますが、どうかご勘弁ください。次号もいろいろ工夫して頑張ります。

本年も皆様にはいろいろとご協力いただきました。有り難うございました。新年もどうぞよろしくお願いいたします。